

# 令和3年度 高森町公民館文化祭 開催しました!



発行所 高森町公民館  
 長野県下伊那郡高森町  
 下市田高森  
 発行人 延正 高野  
 編集 高野 正集  
 本館 高野 正集  
 印刷所 龍共印刷株式会社  
 電話 026-35-9416

## つどえることの幸せ

公民館長 高野正延



「こんなにたくさんの方が来てくれたんだ」  
 幕間に後ろを振り返った私は、椅子席が埋まり多くの人が立って見ているのに驚きました。1番前の席に座っていたので、大ホールが観客で埋め尽くされていることに気づかなかったのです。  
 コロナ禍の中、今年の文化祭発表もビデオに収録して、ケーブルテレビで放映するだけにしようと、当初は考えていました。しかし、警戒レベルが1まで下がったことを受けて、ステージ発表の公開も行うようにしたのです。  
 まるごと収穫祭のようにはいかなくても、多少なりとも観客がいることで、発表する人もお客さんの表情を見ながら、歌やダンスを披露することが出来ます。今まで取り組んできた公民

館クラブ活動の区切りの場として、よりふさわしい設定にしたいと考えました。果たして、冒頭で述べたように、主催者側が予想していた人数をはるかに超える町民の皆さまが、ご参集くださいました。子どもたちの発表の時には、たくさんのお父さんやお母さんが、手を振って応援したりカメラを構えたりしていました。ご家族の支えによって活動が成り立っていることを、改めて感じました。  
 一般のお年寄りのご夫婦も何組かみえていました。発表者の動きをうなずくようにしてご覧になる姿から、こうした機会を楽しみにお出かけくださっていることが見てとれました。  
 目の前で繰り広げられるダイナミックなダンスに引き込まれ、真似をして体を

動かしている小さな子。もう1、2年もすれば、この子もきつとステージで踊る側になつていくのだろうと思いました。  
 1週間にわたって行った作品展示も、少人数ながら毎日訪れる人がおり、ステージ発表当日には、たくさんの方が展示会場にもまわって見てくださいました。ささやかではありましたがアットホームな雰囲気となり、いっしょにつどえることよさと、つどえることのありがたさを感じる文化祭となりました。

表現力、発表力が課題という風評を吹き飛ばすかのように、人前でも、ものおじせずに堂々と演奏し、はじけるように踊る子どもたち。趣味の世界に打ち込む大人に感化されたり、家族に励まされたりして、今日の姿に至つたのだと思います。  
 人間という漢字は「ジンカン」とも読めます。人と人との間で育つのが人間と言われます。子どもたちには、多様な人々のなかでたくさんの人と交わって、興味のあることを楽しみ得意なことを伸ばして、自信をつけていってほしいと願います。そして、このことは自分たち大人にも当てはまることだと思ふのです。



## 高森町秋の文化祭 (展示)



会場に入ると「モッコ」の巨大写真が迎えてくれます。その周りを彩るのは、矢沢秀成先生の指導されている花の会の作品である「ベチュニアの花」です。  
 今年で8年目になるこの会は、「世界に一つだけの花を咲かせよう」という目標の下で、活動されています。2階に行くと、高森中学校建設過程の写真が並べられています。これは記録として後世に残るものですね。古木英男さんの作品です。学習室では「稲穂会」の方々のデジタルカメラによる作品が飾られています。「美人画教室」を拝見すると、18年の活動の中で描かれた作品は、どれも素晴らしいものです。  
 書道の展示は「蘭契書会」です。お話を聞きながら「継」の言葉が心に残りま

した。次は「暮らし方勉強会」の「鍋帽子」の展示です。この帽子の予熱のおかげで料理に火が通り、さらに、保温性も優れます。エコですね。「ほほ絵みクラブ」の皆さんの出展は絵手紙です。沢山の力作揃いで楽しく拝見させていただきました。グラフィトの会「はエコロジーな「籠バック」が多種展示され日々の御努力が偲ばれます。「JAパッチワーク教室」は「バック、壁掛け、ピエロさんの人形」等、見事な作品が多数です。「あじさいの会」はJA女性部の方々、絵手紙のどれも見事です。「フルーツ美味しそう!」市田6区」の市田灯籠流し開催の展示では、2020年から流す様になった溶ける紙製の灯籠があり、環境に優しく配慮



されていると感じました。私ごとですが、もう何年前になるでしょうか今は亡き母と文化祭を見学させて頂いた記憶があります。2人で作品を前に日々感激しました事を、今はつきりと懐かしく思い出します。  
 そして今皆様の作品を拝見させて頂き、どれも熱心に、且つ楽しく取り組まれ

## ステージ発表

11月13日(土曜日)には福祉センター大ホールにてステージ発表を開催しました。  
 歌やダンスなど日頃から熱心に活動されている町民の方々が活動の発表の場として、18団体の皆さんに素晴らしいパフォーマンスを披露していただきました。  
 新型コロナウイルスの感染が心配される中ですが、多くの来場者にお越しいただき、楽しんでいただく貴重な機会となりました。ステージ発表・展示発表の開催にあたり、



たことでしょうか力作揃いで本当に感動です。コロナ禍のため作品の製作が思う様に出来ない1年でしたが、来年こそは多くの方々が、色々な催し物に参加できまうものです。最後にお話を聞かせていただいた皆様ありがとうございました。

# 市田柿誕生100周年

(2020年)

柿は奈良時代に中国から伝来しました。奈良、平安時代の史料からは柿を栽培し、干柿に加工して食べていたことがわかっています。江戸時代には飯田下伊那地域の干柿生産は盛んになり、生産量は飛躍的に伸びていきました。干柿がでかあがると、船に乗せて天竜川を下り、三河を経由して江戸へ運ばれました。お正月の縁起物として重宝されたといえます。

下市田村の伊勢社の境内に生えていた「神木焼柿の古木」が、「市田柿の原木」と伝えられている柿の木です。当時伊勢屋敷に住んでいた児島礼順高智という漢学者が、寺子屋を開いていて、いろいろ焼いて渋を抜き、寺子と一緒に食べたことで村中に広がり、「焼柿」と呼ばれるようになりまし

た。串に刺して乾燥させた立石柿(串柿)が主流でしたが、実が大きく糖度が高い焼柿は、まことに美味し

いと大変好まれました。大正十年「焼柿」を「市田柿」に名称変更され、市田村の壮年団事業として都会の市場へ共同出荷されました。また、戦争中には皇室へ献上され、全国へ市田柿の名が広がりました。戦後、果樹栽培は注目を集め、病虫害防除や施肥、剪定といった技術が確立。昭和23年には県立農業試験場で市田柿の硫黄くん蒸の調査・試験が行われ、殺菌・漂白作用によりカビ防止や鮮やかな色に仕上がる効果が農家へ普及しました。昭和30年代に入ると、生産量・出荷量も飛躍的に増加し、時代のニーズに合わせ包装形態も変わり、セロハン袋からパック詰めに、その後、シーラー機を使った密封包装へと変更されました。

皮むき作業も手むきから全自動へ、皮むき機の進化があり、柿を固定する針穴からのカビ発生をなくすため、針を使わず吸盤で固定する「脱針式皮むき機」が考案されました。また、柿を吊るす「連づくり」にはフックタイプの「柿のれん」の登場で簡便さと衛生面が向上しました。昭和40



受け継がれてきた地域の宝、次の百年へ。未来へつなぐ。市田柿

大正と昭和初期、名古屋の枇杷島(びわじま)市場や東京の神田市場に共同出荷された際に使われた市田柿のラベル。「市田柿製造組合」や「市田柿生産販売組合」の文字が読める。



10月23日(土)、第2回「高森町魅力発見町歩き」に参加しました。参加者15名。真っ青の空に真っ白の北岳、間ノ岳、農鳥岳の頭が見えた。風もなく暑い。8時30分、吉田区民会館北側駐車場に集合、マイクロスバスで大島山瑠璃寺へ。(写真1)



写真1

ち物が違う。六地藏があったのは覚えていたが、そのときの辺にあってたか中央道が邪魔をして見当もつかないのにはあきれる。

そして上街道との交差点。瑠璃寺に向かって右に「大島山不動瀧正道」(従は一里十丁)の大きな石碑。瑠璃寺への道ではなかったのかと改めて思う。

道を渡って、さらに数段石段を下り、左手へ下る道のすぐ先に左右の道に合流する。すると右へ曲がる土手の上に道標(写真4)がある。ここから今回の高森の道の第2の道、善光寺道。

文字が見にくい。ただ下の方に大きな「し」の字と思えるのが見える。濁点無しのひらかなだけの「せんこうし」の「し」。善光寺道だ。その上の右手を指す手に注目。「右になに」と「右」の文字ではなく、右を指す手というのがユニーク。この右手を指す指の道標が、これを入れて4つ続く。

道標に向かって左の道は、給食センターのところにある道標からくる道。右手へ進むと、先の山門の1つ目の石段を下りたところの道が合流する。1つ目の十字路を越えた右手に猫神様が。2つ目の交差点を越えると左に吉田保育園。初めて通る道。

3つ目の十字路を越える。右が吉田神社へ行く道。町を南北に延びる上段の上街道と下段の道をつなぐ道。ここは中学のとき梨の小袋掛けや大袋掛けで何度も通った道だが、広い道に

なっている。越えた左に吉田郷蔵(ここに年貢米を集めた)がある。高森町に2棟、もう1棟は下市田にある。その先の4つ目の十字路、先に左方向への道、少し進んで右方向への道がある。クラックの四つ辻の、左方向への道をちよつと越えた左側、カーブミラーの右下に2つ目の道標がある。「道」の字が変わって。そしてその横には「金比羅山大権現」「秋葉山大明神」。そこにもあそこにもいろいろ石塔がある。古い道だということだ。そして思い込みはもう1点。大きく左右に長い切妻の屋根から、左右に長い家と思っ

## 第2回「高森町魅力発見町歩き」

### 歩いてきました 大島山不動瀧正道、善光寺道

先で左側の道を上がって左に曲がる吉田山城跡へ。城跡の右手が吉田尋常高等小学校跡。その右向こうにある建物が教員宿舎。宿舎の左に鳥居が見える。そのお宮の右奥へ進み右へ回り込むとお墓が見える。お墓を通って左奥の石段を下ると吉田山光寺の本堂の右手に出る。驚いた。こんな機会がないと絶対に通れない道だ。

これで今回の善光寺道歩きは終了、吉田区民会館で休憩、公民館の入り口へ左手前に「基準点」を見つけました。「標高526.29m」。さらに「東経137度52分52秒251、北緯35度33分25秒061」。細かい。一番小さい数字のところなんか、いつも揺れてるんじゃないのか?

終わりは吉田古城跡と竹ノ内家住宅。吉田古城跡で珍しかったのは「高森古城桜」(通称)。竹藪を払ったら中から出てきた桜で、淡紅色五弁の一重咲き、6センチ

の大輪の桜が出てきた。案内板には「高森町に唯一由来する珍しい貴重な桜」とあり、新種とか。高森町のシンボルにしたいという。つづけて竹ノ内家住宅。最後の左カーブを曲がって竹ノ内家が見えて、びっくり。屋根を石で押さえてる!竹ノ内家の紹介で決まって使われる写真は屋根の見えない写真で単に由緒の古い家と思いついて、これは見に来ないと、どこでも見に行かないとだめだ、と感じた。そして思い込みはもう1点。大きく左右に長い切妻の屋根から、左右に長い家と思っ

第1の道、大島山不動瀧正道

大島山瑠璃寺は隆盛期には七堂伽藍、五重塔、三十六院坊と盛観を呈し、その瑠璃寺へ上つてく

る道は、さらに御滝へつづく道だったという。寺を出て下り最初の十字路に伊那谷最大の金剛力士の石仏。右に阿形の密迹金剛、左に吽形の那羅延金剛。延宝3年(1746年)の建立。構造改善や中央高速道路で、今の位置に移されたという。(写真2・3)

第2の道、善光寺道

山門の石段を下り、左右の

この瑠璃寺への道は三六災害の前の年、中学の同級生に八子の子取りに誘われて、初めて登ってきた。だけど金剛力士像は覚えていない。それで思い出してみると、もちろんもつと細い未舗装の道だった。田畑は

今回歩いた善光寺道にあった道標の特別展を時の

高森町にはこうした道標が48基ある。お住まいの地区のどこにあるか調べて歩いてみる。知っていると思



写真3



写真2



写真4

時の駅で「高森の道」展、道標の場所古地図



### 令和3年度 高森町平和推進事業

## 広島市・平和記念公園に 折り鶴を奉納



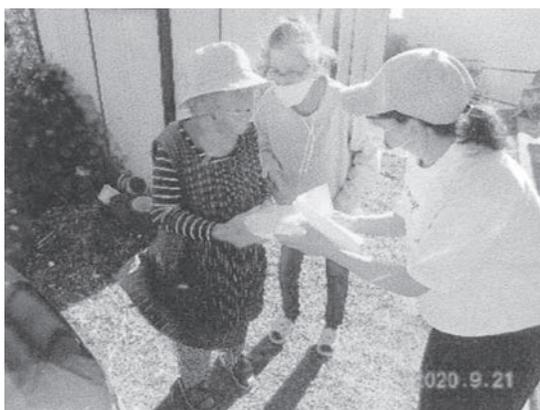
11月16日(火曜日)に壬生町長が広島市国際平和推進部を訪問し、事前に送付していた折り鶴を手に取り、高森町で実施している平和推進事業の取り組みと、2年間広島への派遣が中止されている平和バスの派遣を再開に向けて準備を進めていくことを話しました。



その後、平和記念公園内の原爆死没者慰霊碑に折り鶴をささげ、「原爆の子の像」にて高

# 分館紹介 コーナー

## 上平分館 分館長 前澤 克彦



上平分館は、7常会・世帯数125戸で構成されており、正、副分館長・主事をはじめ、教養部・体育部・視聴覚部・広報部・編集部・計56人ほどで年間事業運営に取り組んでいます。年間の事業計画を、4月の運営委員において承認され年度スタートとなりま

す。主な事業として、納涼祭・敬老祭・常会対抗ペタング大会、また本館及び支館のスポーツ大会参加、分館有志による各種クラブ活動等、多岐にわたり事業参加活動に取り組んでいます。2年度から今年度に渡り新型コロナウイルス感染症が流行し感染拡大の繰り返しが続きました。感染防止の観点から分館事業等殆どが中止となり大変寂しく残念な状況でした。そんな中、敬老祭につきましても

コロナ感染拡大で開催中止を余儀なくされ、その代りに対象者の方々に進呈品「紅白饅頭、お茶セット」を敬老の日にお届け致しました。また当分館では、広報部事業の一環として分館報「コノハズク」を3年3回発行し各戸へ配布して活動状況、催事の様子等報告しています。ここで分館報の題



名を「コノハズク」にした経緯をご説明しますと、「コノハズク」はフクロウ科に属する野鳥で体長20センチほどしかなく、フクロウの仲間では最も小さいと言われているそうです。夜行性で、昼間は木の枝に止まって寝ています。以前、上平地区白髭神社にコノハズクが住み着いていたことがあり昔から馴染みの深い野鳥だった事から分館報の名称としております。最後にありますが、コロナ感染が収まり以前の様に分館事業が出来る事を願っています。

## まちの としょかん

### 地域の情報を世界へ発信 ウィキペディア・タウン in 高森

インターネットに開設され、日本語版で130万記事を収録する百科事典。世界中の人々が使い、誰でも編集できるのが特徴です。読書クラブ「ほんとも」では、11月23日、町の文化財情報の投稿を体験する会を開きました。

資料をもとに書いた町の情報を、ウィキペディアに投稿するこの催しは、世界各地で行われています。地域情報をネット上に公開すると、地域ガイドへの情報提供となり、活性化につながる可能性があり、情報が活用されて副産物が生まれることも期待できます。この日は、重要文化財の竹ノ内家住宅、下市田学校、高森南小学校の3つの記事が投稿されました。



その後の現地見学では、民俗資料館の塩沢主事や、久保田文化財係長のガイドもあり、講義で得たポイントを確認しながら、写真を撮ったり、質問をして深め、情報のインプット作業。竹ノ内住宅では当主の雅弘さんがご在宅で、常には見られない深く座敷下まで達するという室も見せていただきました。



アウトプット作業では、各自持ち寄ったパソコンで、記事を書き、現地で撮った写真を付け、参考文献

## BOOK CAFE ブックカフェ

11月20日、ブックカフェが開催され、地元高校生をはじめ、若者たちが思い入れのある本2冊を持って集まり、本を通じて交流する機会となりました。「面白かったので、次回は友人も誘おう」という声も聞かれ、読書の秋のよい時間を過ごしていただきました。



地域の記録を公開して、知ってもらいたいという強い思いを持って参加してくださった皆さんゆえに、今後、高森町の記事が増えていくことが期待されます。ウィキペディアは不特定多数の誰もが編集できるということから、信頼性が疑問視されてきました。学術分野では利用できないにしても、情報の質を維持するために目を光らせる管理者もいることから、情報の入口となってガイド的な役割をしてくれます。記事を読むだけでなく、書く、加える、修正するという参加もできそうです。

## 編集後記

今年も文化祭の季節がやってきました。高森町の文化祭は、例年「まるごと収穫祭」

に併せ開催してきましたが、新型コロナウイルス感染症により昨年に引き続き収穫祭は中止となり、公民館は個人・団体の1年間の活動の発表の場として文化祭を開催しました。11月8日から14日まで公民館で作品の展示を行い、13日には福祉センターで歌やダンスなどステージ発表を開催し、多くの町民が訪れ盛大に開催されました。高森中学校でも文化祭が開催されます。高森中学校は「小原ケ丘祭」と言い、各クラブなどの発表や音楽会やクラスマッチが行われます。文化祭は、学校にとって年間最大の行事。生徒たちは、長い時間を費やしてその準備に力を注ぎます。その特徴は、学校によって千差万別。学習発表会の色合いの強い文化祭もあれば、エンターテイメント色の強い文化祭もあります。新型コロナウイルス感染症の影響が無く、来年は学校はもちろ